
異世界ハーレム彼女の逆襲！

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ハーレム彼女の逆襲！

【Nコード】

N3797Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

あまりにも凶悪なその目つきのせいで女性に嫌われる主人公、春樹。

そんな彼が召喚された異世界を救い、その報酬として神に要求したものが

「自分を嫌い、避ける全ての女性が自分を好きになる」という

『ハーレム機能』であった。

現実世界に帰った主人公は、その凄まじいまでの性能を誇る

『ハーレム機能』のおかげで、我が世の春を謳歌するのだが……。

山田春樹のハーレム事情

「人を外見で判断してはいけません」

小学校の頃、誰もが一度は先生に言われた言葉だろう。

あの頃、純粹無垢だった俺はこの言葉を信じ、そして裏切られた。

こうして朝の身だしなみを整えるため、鏡の前に立つたびに決り出される俺のトラウマ。

数少ない（というかほとんど唯一と言ってよい）友人であり幼馴染でもある、美鈴が俺に向けて言った我が人生最悪の褒め言葉。

『晴樹ってさー、「容疑者A」の写真が一番かつこよく写るよね！』

……きっと美鈴本人は、必死に俺のいいところを探そうとしていたんだろう。そうに違いない。そう信じたい。生まれつき目つきの悪い俺は、何も知らずに見れば人の一人や二人簡単に殺してそうなのだ。その怖さは毎朝鏡を見るたびに俺が俺にビビるくらいすごい。身長体重、共に標準。運動神経だって頭の出来だって顔だって決して悪くない。そんな俺に彼女どころか友人一人出来ないのは、ひとえにこのハンパなく悪い目つきと、それにより幼少時から虐げられてきたせいですっかり歪んでしまった性格のせいなのだ。

あえて断言しよう。

人とは、外見が全てなのである。

だがしかし。三日前から俺の世界は変わった。

ぼっちだった三日前までの俺よ。さようなら！俺は、俺だけは

あんたのこと、嫌いじゃなかったぜ！

こんにちはリア充な俺。これから長い付き合いだけどよろしくな！

「さて、今日も俺のハーレムな一日が始まるぜ！」

……異世界、というものを知っているだろうか？

パラレルワールド、平行世界。呼び方は様々だが要はこの世とは違う世界の事である。

そんな世界に俺が呼び出されたのは三日前の昼休み。近づいてくるクリスマススの話題をする隣の席の女子たちに気を利かせ、トイレの個室に立てこもった時のことである。別にこの子たちを避けたわけじゃない。プライベートな予定に聴き耳立てるのはマナー違反だという紳士な俺の判断からである。……『やっぱり雪が降るイヴに真剣な眼差しで見つめられたら覚悟しちゃうよね！』という声に俺のトラウマが刺激されたからでは断じてない。……けっ。俺に真剣な眼差しで見つめられたら命と貞操を失う覚悟をするくせによ……。

いやまあ、俺の事はどうでもいい。

本題は、余鈴を聞きトイレのドアを開けたらそこが異世界だったということだ。

思わず呆然とする俺に、その世界の神を自認するおっさんは言った。

「異世界の子よ。貴様に力を与えよう。この世界を救ってくれ」

——正直、「やった！」と思ったね。

この世の全ての女性から（大多数の男性からも、なのだが、この際男なんてどうでもいい）嫌われていた俺にはこの世界に絶望しかなかったからだ。このまま、あと十五年ほど経過したら危うく剣も魔法もない魔物もないこの現実世界で立派な魔法使いになってしまふところだった。

RPGとSLGと凜子攻略はぼっちの嗜み。俺は、過去にやりこんだゲームの知識から思いつく限りのありとあらゆるチート性能を自称神に要求し、その全てを身に付けた。

もちろん、一番大事な『ハーレム機能』もぼっちりだ。

こうして万全の準備を整え、お姫様や女戦士や無口ながらも俺に好意を寄せる女魔法使いや女性神官や幼女に化ける俺にだけ懐く魔物などを従えた俺は。

なんと一日で魔王軍を壊滅させてしまったのである。しかも自分の力に依らずに。

——最大の功績者は人ではなく、もちろん魔物でもなく、現実世界で流行っていた『風邪』であった。この世界の魔物たちは、偶然風邪気味だった俺のもたらしたウィルスにひとたまりもなく敗れ、次々と勝手に倒れていったのである。

余りの事に呆然とする俺を尻目に、僅かな側近に守られた手負いの魔王を追う王国軍。

——やがてその首が獲られ、この世界に平和が戻った時、俺は滂沱の涙を流した。

一日！ たったの一日である。

これでは、ツンデレお姫様が俺にデレる時間も、普段は勝ち気な女戦士がベッドでは人が変わったように甘えん坊になる時間も、我が身を犠牲にして無口な魔法使いを守り抜いた俺に彼女がそっと寄り添ってくる時間も、貞淑な女神官がその経典に逆らい教会で俺に貞操を捧げる時間も、ネコ耳尻尾付きの魔物っ娘（娘と書いて『こ』と読む）とちよつとHなキャッキャウフフをする時間も、全くなかったのだ！

言葉もなく涙する俺を見て、なにを勘違いしたのか神は言った。

「この世界の平和の為に泣いてくれるとは……。よし。本来ならば在り得ぬことだが特例として認めよう。元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持ったまま帰ることを許そう。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！」

……ハーレムの王、山田晴樹の朝は早い。

「やっぱり朝のこのひと時は大事ですね。これから出会う様々な女性とのスムーズな会話の為にTV、新聞、ネットでの情報収集は欠かせませんよ」

思わずナレーション風に言ってしまったが、より良いハーレム生活の為に努力も必要なのだ。……嘘です。本当はもっと深刻な理由があります。

さて。今日も一日がんばるか。

母親の作ってくれた朝食を平らげ、俺はマンションのドアを開ける。

どん。

「きゃっ」

外に出た俺に、『食パンを咥え走ってきたかわいい女の子（笑）』がぶつかってくる。

「おっと失礼。お怪我はありませんか？ さあ、手をどうぞ」

「は、はい……ぽっ」

顔を赤く染めつつ、そっと手を差し出すその女の子。三日前の俺がやれば、手ではなく財布が、「こ、これで許してください……」という言葉と共に差し出されるところだ。

名残惜しげなその子と別れ、エレベーターに乗り込む俺。同乗するのはOL風お姉さん。

ガタン。

「きゃっ」

「おや？ 停電のようですね。エレベーターが止まっています」

「そ、そんな……暗くて、怖い……」

「だいじょうぶ。俺がついてます。さあ、手を握ってあげましょう」

「あ、ありがとう……。大きくて、安心する手……ぽっ」

もう放さないとはかりに力強く握りしめられる手。三日前の俺がやれば、エレベーターの管理会社の前に警察に連絡されるところだ。

名残惜しげなそのお姉さんと別れ、学校へ向け歩き出す俺。目の前を歩くのはなぜかふらふらしている清楚な女の子。

ふらっ。

「きゃっ」

「危ない！」

「あ、すいません……。ちょっと貧血気味で……」

「俺が支えなければ車道に出てしまふところでしたよ。思わず抱きしめてしまいました。が、苦しくはありませんか？」

「あ、ありがとう、ございます、平気です……。男性に抱きかかえられるのは、生まれて初めてです……。ぽっ」

なぜか俺の胸にのの字を書き始める女の子。三日前の俺がやれば、そのか細い指ではなくスタンガンとかそういった防犯アイテムが胸に突きつけられるところだ。

名残惜しげなその清楚な女子と別れ、また歩き出す俺。やがて見えてきたのは……

「なんだ。美鈴か」

「朝っぱらからなんだとは失礼ね……。はい。昨日の分」

怒りつつ、大きな紙袋を差し出す我が幼馴染、椎葉美鈴。

うすい茶色の髪を活動的なショートカットにした、やや釣り目がちの大きな瞳が印象的なこの女とは、幼い頃、何とお医者さんごっこをしたほどの仲。……例えそれが「俺患者さん。美鈴歯医者さん」という変則のお医者さんごっこだったとしても、だ。……ぐらついていた乳歯をこいつに引き抜かれた時の恐怖と痛みは一生モンのトラウマその二だ。

「内訳説明するよ。ラブレター十二通。手作りのお菓子が四つ。同じく手作りのお弁当が二つ。味はひとつはまあまあ。もうひとつは火加減が甘い。あとついでに私宛の『晴樹様に近づくな』という趣旨の脅迫文が一通。殺害予告が三通。この四つはこのまま警察に持っていくね」

……脅迫文より殺害予告のほうが多いことに、女子の想いの闇の深さを感じる。

いやそんなことより。

「なんで勝手に食ってるんだよ弁当。それ俺宛のдар？」

「だって二つも食べられないでしょ？ だから適当に私が減らしておいてあげたの。……だいたいたいさ、最近の晴樹はおかしい。処構わず誰かれ構わずフラグたてまくるの、いい加減にやめなさい。一緒にいる私に迷惑がかかるから」

「そう思うからこそ、こんな早い、あんまり人がいない時間に登校してるんじゃないか」

「それでこれなの？ ちょっとあんたおかしいんじゃない？ 主に

目つきと性格が」

「目は関係ないだろう目は。泣くぞ？」

「性格のほうは否定しないんだ……」

……そうなのだ。神の力はやはり偉大で、今の俺は歩くフラグ製造機。登校するだけでこの始末だ。……ちなみにこいつ、幼馴染の美鈴にはチート能力が適用されない。俺の願いが『俺を嫌い、そして避ける全ての女性が』であつたためと思われる。なんだかんだいってコイツ、美鈴は俺を嫌ってはいないようだ。好意があるかどうかはともかく。あと目の事は言うな。悲しくなるから。

「……だいたい、なんでみんな私をメッセンジャーにするのよ。こんなののどこがいいのか知らないけど、気持ち伝えるなら直接言えばいいのに」

「誰もがお前みたいな鉄の心を持っているとは限らないだろ？」

…『ああ、愛しの晴樹様に気持ちを伝えたい。でも振られたらどうしよう……』ってなるのが乙女心というものなんじゃないか？」

「最近の調査によるとそういう『乙女』は二十年ほど前に絶滅したらしいわよ」

まじかよちゃんと保護しとけよ国！ イリオモテヤマネコより貴重だろうが乙女！

「それに俺だつて別に処構わずフラグ立ててるわけじゃねーよ。……つと、お嬢さん、なんで泣いているんだい？ ああ風船が木に引っ掛かってしまったんだね。……ほらとれた。もうなくしちゃだめだよ」

「ありがとうおにいちゃん！ みずき、おおきくなったらおにいちゃんのおよめさんになってあげるね！」

「……そうね」

「俺だって最初の彼女は理想通りの人を選びたいからな。誰かれ構わずなんてとんでもない。……もしもしそのお婆ちゃん。そんな大荷物持ったまま歩道を渡るのは危ないですよ。持ちましよう。…へえ、曾孫さんの顔を見に？ お婆ちゃんに似てきつと可愛らしいお嬢さんなんでしょうね」

「ありがとうよ、若いの……。あたしがあと七十歳若ければのう…」

「……理想が高いことはいいことだわ」
「だろ？」

「もういいわ。なんだか疲れた……。早く学校行こ。……あ、小鳥ちゃんおはよー」

嫌みのように俺に向かい溜息をついた後、別人のように爽やかな笑顔で挨拶をする美鈴。おい。たまにでいいから俺にもその笑顔を向けるよ。減るもんじゃねーだろ。

「あ、お、おはようございます。美鈴さんと……山田くん」

小さな声で挨拶を返してくる小柄な少女。前髪を切り揃えたセミロング？ とでも言えばいいのだろうか？ その表情は目を隠すように伸ばされた髪のせいでよく見えない。

「おはよー小鳥ちゃん。いつも早いねえ」

「そ、そんなことない、です。……あ、先、行きますね」

ぺこり。そんな感じで軽く会釈すると、小走りで行ってしまっ彼女。

「……小動物みたいな子だな。知りあい？」

「……ええ。私のクラスメイト」

僕と美鈴は腐れ縁とも言つべきか同じクラスになることが多い。
ちなみに今年も例年通り同じクラス、姫神学園高等部1年C組だっ
たりする。

「……いやまあ、ほら。俺、クラスの女子とあんまり口きかないし
……」

「……昨日の調理実習での課題のクッキーを、クラスのほぼ全ての
女子から貰った人の発言とは思えないのだけど？」

「お前くれなかっただろ」

「だから『ほぼ』って言った」

「じゃあ、きつとあの子もくれなかったんだよ」

「最後尾に並んでたわよ。小鳥ちゃん。……ちよつと大人しいけど、
いい子だよ。小鳥遊小鳥ちゃん」

「いい子かどうかはこの際おいておくとして、その名前の付け方は
どうかと思う。親の顔が見たいってこういう時に使う言葉なのか？」

字面を見れば韻を踏んできると言えないこともないが、手抜きにも
程があると思うぞ小鳥遊両親。俺が市役所の戸籍係だったら赤ペン
で添削して突っ返すところだ。

「ま、名前は本人の責任じゃないからね。……晴樹。長い付き合い
に免じて警告しておくけど、ああいう大人しい子ほど思い詰めたら
すんごいんだからね。下手に手出しはしないほうがいいわよ」

「了解。……とりあえず早く教室行こうぜ。これ以上フラグ立てた
ら身が持たないからね」

……この時、俺はもう少し考えてみるべきだったのだ。

小鳥遊 小鳥。 たかなし ことり。

この大人しそうな子が、三日前に変わった俺の人生を、もう一度
変えることになる。

山田春樹のハーレム事情（後書き）

はじめまして。キタキツネと申します。

普段、割とよく人が死ぬようなものばかりを書いているのでたまにはお気楽に、ゆるいものを、と思い勢いで書いてみました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

小鳥遊 小鳥

「……やれやれ。すっかり遅くなっちまった」
放課後。日直の仕事で遅くなった俺は、人気のない廊下を教室目指して急ぐ。

——『晴樹君との日直』は今のクラスの女子にとっては一種のステータスになるくらいの幸運らしく、黒板を消そうとして手が触れ合う、ゴミ出しに行つて折からの突風でスカートがギリギリまでまくれ上がり「……みた？」と上目づかいで言われる——黒だった。気合入りすぎだろう。山口さん——などと、フラグのオンパレードを積み重ね、ようやく担任の待つ職員室に日誌を提出するところまで行つたのだ。が。

そこで我らが担任、菊池先生（二十七歳。独身。大人の色気むんむん）と山口さんとの間で女の戦いが勃発。「日誌の内容に関して山田君に確認することがあるわ。個人的に」と俺だけを引きとめようとする菊池先生と、「いっしょにお家に帰るまでが日直です！」という遠足と混同しているらしい山口さんによる舌戦はお互い一歩も引かず、どういう流れでか「では実技によつて決着をつけましょう」という先生の挑発に「先生が失つた若さと言つたものを見せ付けてあげます！」と山口さんが言い返しつつスカートのホックに手をかけたあたりで男性教師による物言いが入り、ようやく俺は解放された。

ありがとう日本史の田中先生。あんたの授業、脱線した雑談と豆知識が多いけど俺は嫌いじゃないよ。もしタイムトラベルとかして過去に行つたら役に立つかもしれないし。

菊池先生と山口さんによる「実技対決」を見てみたい気持ちはもちろんあったが、それよりも俺にとっては夕方六時から再放送されているアニメのほうが重要だった。……『チート機能』によりリアルでの女性との関係は大幅に改善されたとはいえ、二次元の女の子を愛する気持ちも失わない俺である。今日は青と赤の名シーンだ。見逃せないぜ。

逸る気持ちをそのままに、恐らく無人であろうと予想した教室のドアを勢いよく開ける俺。意外なことにその目に映ったのは、窓から差し込む西日に佇む一人の地味な女子生徒。

「あっ……」

小鳥遊さんだった。

「おう。小鳥遊さんか。もう遅いぞ？ どうした？」

「あ、あの……山田くんを、待ってました……」

Oh。素晴らしき『チート機能』。この地味めな彼女にもしっかりその力は働いていたと見える。だがしかし。

「本当にすまん。小鳥遊さん。今日は俺、どうしても外せない用事があつて……」

ひとりぼっちは、さびしいからな。俺が見てやらなきゃいけないんだよ。テレビ。

「あ、あの、わ、私、山田くんが、山田くんのことから……」

「あれ？ 聞いてた俺の話？ 俺、今から大事な用事が」

彼女の様子を窺う。……あ、だめだこれ。ものすごくテンパって

る。震えるその小さな手はスカートの端をぎゅっと握りしめ、俯いたその顔は過度の緊張に赤くこわばり、多分、俺の声なんて一切届いていない。参ったなあ。

確かにアニメは予約録画している。でもな、リアルタイムで見ながら実況板に書き込むあの一体感がいいんだよ。俺たちぼっちが多くの同志たちと気持ちを一体にして感動を分かち合うことが出来る唯一の時間。それは何より貴重なもので、本物のBBS戦士と自負する俺としてはやはりここは話を切り上げて。

「め、迷惑かとは思ったけど！　で、でも、言わないで後悔するよりはいいかなって！」

そう言っで自分を奮い立たせるように勢いよく顔を上げた小鳥遊さん。その拍子にトレードマークのように目にかかっていた長い前髪がさらりと顔の横に流れ、その潤んだ大きな瞳が見える。……あれ？　意外なほど整った顔？　というかちょっと幼い感じだけど、この子、前髪上げたらすつごく可愛くね？

「……わかったよ小鳥遊さん。話を聞くよ」

「山田くん……ありがとう。で、でも、気持ち落ち着けますから、ちょっとだけ待ってください」

すまん全国のBBS戦士たちよ。俺はちょっと遅れる。が、必ず参戦する。具体的にはオープニング後のCM中には行けると思う。だからほんのちょっとだけ戦線を支えていてくれ。今日も勢いTOPテン入り目指して頑張ろう。

すう……はあ……と数回深呼吸してから、やがて落ち着いたのか小鳥遊がついに言う。

「……私、山田くんのが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願いします」

……正直、すげえときめいた。外見的にも相当可愛い（しかも普段隠しているところが高ポイント）な小鳥遊さんが、その白い肌をうっすらと赤く染めながら、潤んだ瞳に少しだけ涙を浮かべつつ上目づかいで告白してきたこの光景こそは、俺が何度も夢見て、そして諦めていたものだった。でも。

「……ごめん。小鳥遊さん。今の俺は、特定の彼女を作る気がないんだ。だから、ごめん」
「あつ……」

そう言っただけで、俺は後ろ手に教室のドアに手をかける。そうなのだ。夢の『ハーレム機能』を手に入れた俺にとって、全人類のほぼ半数がそのターゲット。今の俺は選ぶ方の立場。小鳥遊さんが悪いという訳ではない。むしろ今現在においては彼女候補の筆頭と言ってもいい。でも、選択肢は多いに越したことはない。

まだ慌てる時間じゃない。諦めたらそこで試合終了なのだ。

100%理想の彼女を手に入れるその日まで、俺は、戦う。

「……じゃ、俺はこれで。ほんと、ごめんね」

がらつ。……ぬるん。びしゃ。

「ぬおおおおお……！ なんじゃこらあああ……！ 」

背後の小鳥遊さんに謝罪の意味を込めた眼差しを送りつつ、でも確かな拒絶の意志を見せるために教室のドアを開け廊下に出ようとした俺を、何かぬらぬらしたモノが押し戻した。

「しょ、触手！？ ええええっ！ なんでドア一杯に触手が蠢いてるんだよ！？」

思わず尻もちをついた俺は慌てて左右を見回し、ベランダ伝いに隣の教室から脱出するというプランを選択。猛ダッシュで西日差し込む窓へとりつく。

「ぐっ！ ま、窓も、開かない、だと……！」

「あ、あの、無駄、だと思います。『時空固定』、しちゃってます、から……」

恥ずかしそうな声でそんな厨二っぽい単語を言うのは、小鳥遊さん。

——『時空固定』……異世界に行った時に無口な魔法使い子から聞いたことがある。簡単に言うときを止める魔法だとか何とか。……そのまま窓から外を見る。確かにさっきから差し込む西日は一切の角度を変えず、テニス部が打ちあげたボールは空中で止まってる。この寒いのに下半身のみユニフォーム姿の女子のアンダースコートもめくれ上がったままだ。……あれはE組の武田さんか。いい脚している。やはり女性の価値は胸だけではなく脚にもあると言っているんだろう。ぜひ一度対戦（してじっくり鑑賞）してみたいものである……じゃなく！

「な、ななな、なんだと!? 魔法!? 魔法だつて!?!」

「は、はい。ちなみにその子は『触手結界』魔法の『うね子』さん、です」

そう言つて小鳥遊さんが指さした先は先程の触手ドア。うね子さんとやらが挨拶するようにうねうねしている。その動きに合わせてすごい勢いで俺のSAN値が削られていく。

あまりのことに呆然とする僕。それを不思議そうに見つめる小鳥遊さん。

「あ、あの? 時間がないということでしたので気を効かせてみたのですが……。余計なお世話でしたか?」

あー。そうか。時間が止まってるのならオープニングに間にあうね。よかった。

「……いやいやいや。落ちつけ俺。あの、小鳥遊さん? 魔法だつて?」

「はい。魔法です。山田くん、あつちで見たことなかったんですか? 『時空固定』」

なんだと!?

「あ、あつち……つて、小鳥遊さん。まさか……」

「はい。私も、山田くんと同じで、『あの世界』に呼ばれて、帰ってきたんです。ただ私は、神様じゃなく魔王さんのほうに呼ばれた側でしたけど……」

そうか！ 神様に呼ばれた俺がいるんだ。魔王側が同じことをしないという保証はない。

「つ、つまり、小鳥遊さんは向こうの世界で俺に倒された魔王の仲間だったと……。え、も、もしかして魔王を倒された復讐で俺を殺そうと!？」

ちよつとまってくれ！ 今の俺は戦闘能力皆無だぞ!? そもそも風邪ウィルスのせいで俺、向こうでも一切戦闘なんかしてないし！ このクラスの魔法使いに襲われたら俺なんか秒殺だぞ！

「へっ？ 復讐？ そんなこと考えていませんよ？ そもそも魔王さん、生きてますし」

「ちよつと待つて。国王軍が魔王の首獲つてきたの見たぞ俺」

「あれは魔王さんが用意した人形、ダミーです。……魔王さんは、確かに他の魔物さんたちと違って死ぬことこそなかったけど、でも衰弱したのは事実でしたから。……今は国王軍に見つかっていない隠れ家でじつと体力の回復を図っているはずです」

「なんてこつた……」

くそっ！ それならそうと言えよ魔王！ それ知ってればもう少し向こうに滞在して、姫や女戦士や女神官や女魔法使いや女獣っ娘との時間を堪能してきたのに！

「わ、私、ですね。魔王さんの側近として勇者のパーティーを迎え撃とうとして、気がついたんです。勇者が、山田くんだったことに……。春から、入学式からずっと気になってた山田くんが、私が呼び出された世界にいる……これって運命なんじゃないかな、って」

俺の動揺をよそに、夢見るように語り始める小鳥遊さん。……そ

の、はにかむような表情と、背後のドアから見え隠れする触手のコ
ラボレーションがえらくシニールだ。

「……そして、一日で魔王軍を壊滅させた山田くんが、敵であるはずの私たちのために涙を流すのを見て、確信しました。『ああ。私は山田くんの、敵にすら同情して泣いてくれるこの優しさを好きになっただんだ』って……」

勘違いですそれ。ハーレム計画が駄目になったと思って泣いてただけです俺。っていうかどいつもこいつも俺の涙を深読みし過ぎだ。もって考える。頭使え。

あとね、その気持ち自体も多分、自分自身のものじゃないから。それ俺の能力だから。

異世界にいた俺には、と言うか今でもだけど、『ハーレム機能』がついてるからさ、俺の事を見ただけで女の子は無条件で俺の事を好きになっちゃうんだよ。

「だから、思い切って魔王さんに話したんです。全てを。そうしたら魔王さん、私の気持ちに同情してくれて、この世界に帰してくれました。……向こうで身に付けた、魔法の力を全てそのまま、で」

なんてことしてくれやがる魔王！　ってか覇盾だろそれ！　俺は『ハーレム機能』だけだったぞ！

「……そんな魔王さんの気持ちに応えるためにも、私、勇気出しました。……ずっと隠しているつもりだった気持ちを打ち明けようと……勇気がなくて、三日もかかったし、実は昨日、ちよつとズルして調剤した『惚れ薬』入りのクッキーも渡してみたのですけど、効果、なかったみたいですし。……やっぱり勇者様の力はすご

いですね」

控え目ながらも可愛いラッピングとは裏腹に、もの凄くどす黒い気配を感じるクッキーがあったのはお前のだったのかよ！ 何となく嫌な予感がして食わなくてよかったよ！

「だから、今度はもう一度。ちゃんと自分の口で言います。……好き、です」

「いや。小鳥遊さん。気持ちはいれしいけど、さっきも言ったように」

ピキン！

そんな効果音を出しつつ、教室の床、壁、そして天井までが一瞬で凍りつく。

これは『絶対零度』の魔法！？

別名『エターナルフォースドブリザード』！？ 俺は死ぬ！？

「ご、ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくて……。か、感情が高ぶったりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって……！」

……『デット オア アライブ』ならぬ『デット オア ラブ』か……しゃれにもならねえよそんなの。……俺は必死に、生き残る術を考える。

「小鳥遊、さん」

「は、はい！」

「ごめん。今は彼女作る気になれないって言うのは本当なんだ。それに俺たち出会ったばかりでしょ？」

「あ、あの、一応クラスメイトになって八ヶ月ほどたってます、けど……」

間違えた。

「し、親しくはなつてないって意味ね！……だから、そのと、友達からということではどうだろう？」

「お、お友達、からですか？」

「そう。友達。俺、友達少ないからさ、人づきあいとか苦手なんだ。だから、その、い、いきなり彼女とかだと困るけど、まずは、友達からってことなら、いいかなあって」

正確には『少ない』ではなく『いない』のだが、この際そういう細かいことはどうでもいい。……それ認めると悲しくて涙が出ちゃうしな。

俺の起死回生の一言。俯いてその言葉を噛みしめるように聞いていた小鳥遊さんが、やがて、顔を上げて言う。

「わかりました。私、がんばります。いっぱい、いっぱいいっぱい尽くして、いつか山田くんに認められるようにがんばります。よ、よろしく、お願いします！」

そう言って控え目ではあるが、やっと笑ってくれた小鳥遊さんの笑顔は直視できないほど眩しくて、俺は危うく本気でこの子に惚れてしまうところだった。……が。

「だ、だから。浮気は、だめ、ですよ。山田く……ううん。晴樹く

ん！ …… あ、あの、私の事は『小鳥』って呼んでください、ね…
…」

……こうして俺の夢のハーレム計画は崩壊することとなった。

——異世界ハーレム彼女の逆襲によって。

小鳥遊 小鳥（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグブレイカー

——異世界。

そこは俺にとって夢のハーレムであった。

豪華な椅子にふんぞり返った俺は、さて今日はどの娘とナニして遊ぼうかと、周囲に待るたおやかな女性たちを見回す。俺を見上げるその瞳はうっとり濡れ、「さあ私を選んで！　そして食べて！」言っているようで、この中から一人を選ぶという作業がまた、楽しくも心苦しい。

迷いに迷いつつやがて一人を選んだ俺が、『そうか。別に一人じやなくてもいいじゃん。よしこの際あと二、三人……』と他の娘たちも物色し始めたその時、轟音と共に雷が落ち、天から一人の小柄な人物が舞い降りる。その表情は長い前髪に隠れ、見ることが出来ない。

——その人物が、小さな口から呪詛の言葉を紡ぎだす。

「晴樹くん……。浮気はだめって言いましたよね……」

こつ、こつ、こつと軽い足音を立てて近づいてくるその人物。彼女が軽く左右に手を振るだけで、俺の命よりも大事なハーレム要員たちが一人、また一人と声もなく消えていく。

「や、やめろ……近づくな……」

やがてその悪魔は俺の前に立ち、その綺麗な前髪をかき上げつつ言うのだ。

「浮気者の晴樹くんには、お・し・お・き・です。……少し、痛いですから、ね」

「や、やめ、やめろ……。やめろ！ やめろおおー！！！」

「小鳥遊iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

がばっ！

「はあ、はあ、はあ、はあ……。おお。ゆ、夢か……」

俺はベッドの上で息を整え、冷や汗を拭う。

三日前、いや、もう四日前か。異世界から『ハーレム機能』を持ち帰り、生まれ変わった気持ちでこの世界を満喫していた俺の前に現れた悪魔、いや魔王の使い。

その名も小鳥遊小鳥。同じく異世界帰りのクラスメイト。

魔王にもらったチート能力をフルに使って俺に迫りくる彼女の存在に、俺は心の底から怯えていたのだろう。まさか初めて会った（俺の主観的に、な）その日から夢にまで出てくるとは思わなかったぜ……。

——『……私、山田くんのが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願いします』——

……昨日のことが思い出させられる。

前髪上げたら実は可愛かったというのは『眼鏡を外したら美人』に通じるものがあり、それだけでご飯三杯はイケる。控え目な態度、鈴を転がすような声。正直言って小鳥遊は俺の好みにはうちりあつてはいる。だがしかし。

問題は、ふたつ。

その一。……いくら可愛いとはいえ、チート機能を使ってまで迫ってくるのは反則だと思ふのだ。小鳥遊君。告白の為に時間を止める魔法使いなんて聞いたこともねえよ。

その二。……お前がチート機能を持っているように、俺も『ハーレム機能』を持っているんだ。俺の夢はハーレムを作り、さらにそこから厳選した最高の彼女を見つけること。その崇高な野望を邪魔すんじゃねえ。

「……って、本人を前にしたら言えないしなあ……」

凄まじい威力の『ハーレム機能』を持つこと以外は、今の俺はただの人。

魔王からその凶悪な魔法の全てを受け継いだ小鳥遊を振って怒らせてしまったら……そう考えるだけで身震いがする。

「何とか対策考えねえとなあ……」

頭の中で『脳内ハルキ君』一号から五号までを呼び出し、対策会議を開きつつ登校しようとマンションのドアを開ける俺であった。

「お、おはようございましゅー！」

囃んでる。ましゅってなんだよましゅって。可愛いじゃねーか。

ではなく。

俺は目の前に立つ小柄で伏し目がちな女の子に問い掛ける。

「た、小鳥遊！？　なんでここに！？」

「あ、あの……いっしょに登校したいなあ……って思ってた……」

「あ、そ、そうなんだ。ハハハ光荣だなあ。でもよく俺んち知ってたね？」

「そ、それは、その、こ、この子が調べてくれました……。探索系使い魔の『ミシル』ちゃんです」

きしゃあああー！！

挨拶のつもりなのだろうか？　小鳥遊の華奢な肩に止まっていた化け物、——外見的にはそうだな。ひよこくらいのエイリアンに悪魔の羽を付けたような感じ？　——が、まともに聞いたら石化してしてしまいそうな鳴き声を上げる。

朝っぱらからヘヴィなモノ見せるな。SAN値が下がるわ。

そんな俺の動揺をよそに、その『ミシル』ちゃんとやらの顎を撫でる小鳥遊。

「ありがとう。ミシルちゃん。あとでおいしいごはんあげるからね」

きしゃああああああ！！

多分喜んでいるのだろ。ばつさばつさとその蝙蝠のような翼を
はためかせるミシルちゃんという生き物。……こいつにあげる『お
いしいごはん』とやらが一体何なのかちよつと気になったが、それ
聞くとSAN値だけではなく食欲までなくなりそうなので黙ってい
た。

とりあえず。

「そろそろ行こうか小鳥遊。さ、そのミシルちゃん戻して。目立つ
から」

「あつ。は、はい」

小声で何かを呟く小鳥遊。その声が終わると、ぼんつという音を
立ててミシルちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「よし。じゃあ行くか。……つて、あれ？ あの娘は……？」

そう言っただけで歩き出そうとした俺の視界に、昨日の食パン娘が映る。

反射的に手を挙げて挨拶しようとした俺は妙なことに気がついた。
誰かを探すようにきよきよと周囲をうかがう食パン娘の目には、
俺が入っていないようなのだ。

やがてちよつとがっかりとした風に肩を落とし、歩き去る食パン娘。

「……なんだ？ おかしいな」

フラグが立たないなんて。

「え？ 何か言いましたか？ 晴樹くん？ ……あ、忘れてた」

何かを思い出したように軽く手を振る小鳥遊。その途端、ぱちんという軽い音がして、俺たち……というかこの一帯を覆っていた透明な膜のようなものが弾ける。

「何だ今のは？ 小鳥遊？」

「えっと、『隠密結界』を解除しました」

「なんでまたそんな物騒な物を？ 誰かに狙われているのか？」
ゴルゴ三十さんとかに。

「や。そうじゃなくなつて……。は、晴樹くんのお家の前で待つてるところ、見られたら恥ずかしいなあ……って思つて……。あ、でも嫌つて意味じゃないですからね」

そういつてうつむきもじもじしている小鳥遊。その仕草は可愛いけどやつてゐることは意外に大胆というか凶悪。それで今日、新聞届いてなかったのか。新聞屋すら追い払つたのかよ隠密結界。新聞代返せ小鳥遊。

「ん。……解除したのなら、まあいいや。行こうぜ。エレベーターはこつちだ」

そう言つて今度こそ歩き出した俺。

エレベーターの前で到着を待つのは、昨日のあのOL風お姉さん。ここはひとつ、爽やかなあいさつで更に好感度を上げておくべきだと、俺の中のハーレム魂が告げている。朝から（正確には夢の中

から）続くゴタゴタで引きつり気味の顔を無理に笑顔へと変え、声をかけようとする俺。しかし。

「あ。晴樹くん。エレベーター待たなくても平気ですよ。——えいっ」

グイン。

「うおうつ！ な、なんだ！」

一瞬で、五階にいた俺たちは一階のエントランスへと移動する。

「瞬間移動です。便利、ですよネ？」

ほめてほめてと言わんばかりに小鳥遊が俺を見上げる。尻尾とかついてたらぶんぶん振り回しそうな勢い。相変わらず小動物系な彼女。名前は鳥類だけど。……ではなく。

「あ、あのな。小鳥遊。便利なのは認める。認めるけどな、こうぼんぽん魔法を使ったら目立つちまうだろ？ 少しは控えようぜ」
「あ……。そ、そうですね。ごめんなさい……」

途端にしゅんとしてしまう彼女。もともと小柄でうつむきがちなこの娘には、こういう表情もよく似合う。思わずSに目覚めてしまっている。しないけどな。女の子は愛でるものであって苛めるものではない。断じて。……いやでも本人が望むのなら別ではないか？ 小鳥遊って案外Mそうだし……。

先程逃げ出した『脳内ハルキ君』たちが再び集合し、『SMは有りか否か』という全人類にとって有意義な会議を開き始めてしまっ

たため、不覚にも俺は、エレベーターから出てきたOL風お姉さんに気付くのが遅れた。

あつ……そう思った時には件のOL風お姉さんは、軽くこちらに目線を送り、小鳥遊といっしょにいる俺を見てちよつとさびしそうに微笑んだまま歩き去っていくところだった。

……まただ。またフラグを立て損ねた。

絶対の自信を持つ『ハーレム機能』がうまく働かないことに不審を覚え、立ち尽くし考え込む俺の袖をそつと引つ張る弱々しい力。

「何だ小鳥遊。今ちよつと考え事をだな」

「そ、それ……。その……こ、小鳥つて呼んでほしいなあ……つて」
「ああ」

そう言えば昨日、そんなこと言ってたっけ。んー。でもなあ。

「すまん。小鳥遊。やっぱりその頼みはちよつと聞けないかも」
「え……。やっぱり私って迷惑ですか……」

先程とは比較にならないほどの暗い顔。というか泣き出す寸前にすら見える。

「違う違う。どっちかつーとお前が想像する理由とは逆のベクトルの理由だよ。……いいじゃん。小鳥遊つて名前。俺はそっちの方がいい」

小鳥も確かに珍しい名前だけど、小鳥遊姓は俺にはうらやましい。これは全国の『山田』だけではなく『田中』君『鈴木』さんも同

じように思っんじゃないかな？　ありふれた姓をもつ俺たちは『小鳥遊』のような個性ある姓名に憧れるのだ。

「『山田』なんかよりよっぽどいい名前だよ。『小鳥遊』。俺は好きだな」

そう言って歩き始める俺。いい加減急がないと遅刻しちまうわ。

「まあ、『小鳥遊小鳥』って続くと正直どうかとも思うが……。あれ？　小鳥遊？　おい。なにしてんだ、早く行こうぜ？」

返事がないことに違和感を覚えふと振り向くと、エントランスで固まっている小鳥遊がいた。その顔は限界まで赤く染まり、今にも倒れそう。

「や、『山田』姓より『小鳥遊』姓がいいって……。そ、それってもしかして婿入りしたいっていう意思表示、もももしかして、プロポーズでしょうか……？」

「ちげえよ！　バーロー！　早く来い！」

すげーポジティブだなこいつ！　高校一年生の身分で求婚なんかするか！

俺は夢見がちなこの少女の手を強引にとり、引きずるようにして歩き出した。

「……やっぱり遅すぎたか。美鈴、行っちゃったなあ」

「いつも美鈴さんと登校してるのですか？」

「んー。何しろ保育園以来、十年に渡る習慣だしな。……誤解するなよ？ 腐れ縁ってやつだからな？」

「あ。はい。わかってます。……いい人ですよ。美鈴さん」

「そうかあ？」

思いつき疑問形で言ってみる。いい人は俺に一生モノのトラウマを植えつけたりしないと思うぞ？ しかも複数。

「はい……。私、人見知りだからクラスにも馴染めなかったのですが、美鈴さんは数少ない友人です。いつも優しくしてくれます」
「そついうもんかねえ……。あつ！！」

それに気がついた俺は無意識に飛び出す。目の前にいるのは昨日の清楚な女の子。昨日と同じようにふらふらと車道に出そうになっている。

——昨日と違うのは車道のほう。そんな彼女に向かい、一台のトラックが速度を上げて迫ってくる。運転手は携帯片手に通話中のようで、歩道をよるめく彼女に気がついていない。

『危機的状況にある女の子を救う』……一級フラグ発動だ。

でも待て神様よ！ 確かに俺はハーレムが欲しい！ でもそのために女の子が危険な目に合うようじゃ本末転倒なんだよ！

「くそつたれ！ 間にあえ！！」

俺は限界まで腕を伸ばし、その女の子を引き戻そうとする。しかし、その手はむなしく宙を掴むだけで、彼女の身に届かない。

もういつそ俺自身の体をクッションにして彼女を救おうと思い、車道に飛び出す覚悟で足に力を入れた俺の顔の横を、凄まじい突風が吹き抜けた。

「っっっ！」

そのあまりにも強い風力は、よろける女の子をその威力で歩道側に戻し、俺の目の前で展開される予定だった悲劇は俺以外のだれにも悟られることなく回避される。

——その風は、俺の後方から吹いていた。

正確には、小鳥遊小鳥、その掌から。

「ま、間にあつて、よかったあ……」

そう言つてへなへなと座り込む小鳥遊。

「……よくやった。小鳥遊。風系統の魔法も使えるんだな」

「えっと、実は風系統が一番得意です。……あつちにいた時は、魔物の皆さんたちから、風みたいに早い小鳥つてことで『隼の魔法使い』って呼ばれてたんですよ。えへへ……」

異世界にもいるのかハヤブサ。いらん豆知識をありがとう。

ぺたんと地面に座り込みつつも、ほめられたのがほどうれしかったのか、にこにここと微笑む小鳥遊。ご褒美代わりに何となく頭を撫でてやる。

「わあ……」

わあってなんだわあって。頭撫でただけだろ。そんな蕩けそうなほど幸せな顔すんな。俺の方までときどきしちゃうじゃねえか。

「……って、しまった！ あの子は無事か！？」

慌てて振り向いた俺の目に映ったのは、風魔法の衝撃で転んでしまった女の子を抱えているトラックから降りた運ちゃん。……やがて二人の間に何らかの話がまとまったのか、女の子はトラックの助手席に乗り込み、運ちゃんはハンドルを握る。……恐らく念の為に病院にでも行くのであろう。

……なるほど。二度あることはサンドマン。砂男だ。いや意味不明。

俺はいまだに座り込んだまま呆けている小鳥遊を見下ろす。

つまり、こいつだ。こいつが全ての原因だ。

多分、本人にその気はない。ないと思う。ただ、溢れんばかりの俺への想いが、俺の立てるフラグを結果的に片っ端からへし折っていくのだ。恐らく、無意識に。

「……上等じゃねえか……！」

めらり。そんな音を立てて俺の中の『ハーレム魂』に火が灯る。

そっちが凄腕のフラグブレイカー……そうだな。異界での二つ名をもじって『隼のフラグブレイカー』とでも呼ばせてもらおうか……だとしても、俺だって捨てたもんじゃない。自称『一級フラグ建築士』である俺と、小鳥遊、お前のその力。

どちらが上か、白黒つけさせてもらおうか……。

静かに闘志を燃やす俺と、そんな俺が無意識に頭を撫でまわしているせいで、魂が抜けかけてしまっている小鳥遊。……そんな俺たちは時間が止まったようにその場に立ち尽くし……。

その日、学校に遅刻した。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグブレイカー（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています

「……すいません。山田です。遅刻しました」

「す、すいません！ 小鳥遊小鳥です！ 遅刻です！」

……『ハーレム機能』不調の理由と小鳥遊の正体に気がついた俺が闘志を燃やしていた時間は結構長かったようで（あとついでに小鳥遊の魂が抜けていた時間も）、結局、俺たち二人はホームルームの時間に間に合わず遅刻してしまった。

不幸中の幸いだったことは、今日の一時限目がロングホームルームだったこと。ロングホームルームは各クラスの担任が教壇に立つので、つまり。

「あら。山田君。先生心配したわよ！ ……あ。小鳥遊さんも遅刻だったのね。まあいいわ。二人とも席について」

……こういうことだ。『ハーレム機能』がばっちりかかっている菊池先生（二十七歳。独身）は俺に甘いのでお咎めなしで済んだ。……それはいいけど、菊池先生？ 小鳥遊の扱いがあんまりな気がしますぜ？ ついでに、小鳥遊。遅刻したことに気付かれないって、お前普段どれだけ影が薄いんだよ。

「……ふう」

朝から激しくSAN値が下がる展開が続いたため、席に着くなり溜息が出る俺。そんな俺に小声で話しかけてくるお隣さん。美鈴。

——席まで近いとか、腐れ縁にも程がある。

「……どうしたのよ。あんたが遅刻って珍しいじゃない」

ぼっちは目立つことを嫌うため、基本的にルールを守る。少し前までの俺もそうだったし、最近はフラグ乱立防止のため更に早起きだったから、確かに遅刻は珍しい。

「いやまあ。いろいろあつてな……」

思わず遠い目をしてしまう。イベント盛りだくさんの朝だった。うん。

「ふうん……。それって、小鳥ちゃんに関係あることなの？」

「……何でそう思う？」

「そりゃいつしよに遅刻してくればそう思うつしよ。それに……」

そう言いつつ、美鈴がちらりと目線を上げる。つられてそちらを見ると、何やら挙動不審な小動物——小鳥遊と目が合う。慌てて視線を逸らす小鳥遊。

「さっきからずっと晴樹を気にしてるみたい。……何があつたのよ？」

「何って言われてもなあ……」

むしろ俺が聞きたい。俺、昨日『友達から』って言ったよなあ……？

「昨日も言っただけど、ああいう大人しい子ほど危ないんだからね。手作りチョコに何か混ぜられたり、家の前で待たれたり、あんたに近づく女の子を排除したりとかしかねないんだから。そうなる前にちゃんとしておきなさいよ」

先生。うちの幼馴染がチートでピンポイントな千里眼の持ち主です。

あともうそれ全部体験済みです。かなり手遅れです。女って怖い。お前も小鳥遊も。

「ちゃんと……ねえ」

俺はもう一度小鳥遊を見る。

……俺の視線に気がついた小鳥遊が、小さく控え目に、指先を振っていた。

「さあ。今日のロングホームルームは月一回の恒例席替えタイムですよー！」

いえーい！ とノリのいい何人かの生徒たちが応えた。

何がそんなに楽しいんだお前ら。……いや、楽しいんだろうな。学校生活を満喫しているお前らにとって席替えは重要イベントの一つなんだろうよ。俺たちぼっちにとってはせいぜい「後ろの方がいいな」とか「日当たりいいほうがいいな」くらいしか希望はないけどさ。

……と、先週までの俺ならそう思ってたろう。

今は別の意味でどこでもいい。なぜなら俺には無敵の『ハーレム機能』がついている。隣がどんな女子であれ、一瞬でフラグを立てることが可能だからだ。

俺はのんびりと担任の用意した席替え用クジに並ぶクラスメイトたちの最後尾につく。……と思っただけ違った。後ろにちっこいのがいた。小鳥遊だ。

「……晴樹くんの近くになれますように晴樹くんの近くになれますように晴樹くんの近くになれますように……！」

「……おい小鳥遊。目立つからそうやって俺の名前呪文のように連呼すんな」

怖いわ。

「ひゃい！……あ、でもきつと目立ちませんよ、多分……」

「なんでだよ？……まさかまた隠密結界でも使ってるのか？人前で魔法使うのはやめとけとあれほど」

「違いますよう。……だって、ほら」

そう言って小鳥遊が指さしたのは女子の一群。何やら大騒ぎしている。

「山田君の隣を！お願い神様！」

「やまだーやまだーやまだー……」

「山田晴樹！山田晴樹の近くを一枚よろしく！」

「やつまっだっ！やつまっだっ！」

「山田君が教卓の真ん前になりますように……。いつそ担任特権で……」

……。

何あの山田祭り。山田特売日か？
ちよっと君たち怖いんですけど？
あと約一名、生徒じゃない大

人の女性の声が混じっているような気もしましたが、俺の勘違いですよね菊池先生？

異様な教室の状況に怖いっているうちに、くじ引きは俺の番になる。その瞬間、教室は静寂に包まれ、俺の一挙一足にクラスメイト全て（プラス大人気ない大人一名）の視線が集まる。その有様は、まるで年末恒例の異種格闘技トーナメント抽選会場のよう。もちろん俺の立場は大本命選手。俺の引く一枚に、このクラスの女子の思惑が何重にも絡まる。

ゴクリ。

その雰囲気吞まれた俺は箱の中から一枚のくじを取り出し、何となくやらなくてはいけないような、そんな義務感に駆られ、そのクジのナンバーを読み上げる。

「や、山田晴樹。十一番」

うおおおおおおおおお！！！！

「十一番！？　ってことは隣は五番と十七番ね！」

「外れたわ！」

「五番ありませんかー。五番買いますよー」

「納得できません！　やり直しを要求します！」

「やり直し要求多数により再実施はありね……。いつそもう山田君の席は教卓前の指定席に、うっん、この際だから教卓を席にしてみようのも……」

うん。もう一度言う。お前ら怖い。

俺の隣の席を売るな買うな。ダフ屋は違法行為だ。ちなみに幾ら出す気だ？

あと菊池先生はもう少し自重してください。大人なんだから。

一部女子生徒（プラスどうしようもない大人一名）によるクジの再実施が叫ばれたが、この展開に呆れている男子生徒たちが率先して民族大移動を始めると、やがて諦めたように女子も動き出す。…すまん。男子生徒の諸君。俺も君らの立場なら呆れる。というかむしろ怒る。それどころか呪いすらしたかもしれない。比較的大人しい男子ばかりのクラスで良かったと心からそう思う。

窓際最前列から一、二と続き、廊下側最後尾の三十六で終わるこの順番、つまり俺の席は窓際から二列目、後ろから二番目、なかなかいいポジションだ。

「俺の席はここか。……一ヶ月よろしくな。お隣さん」

「ええ。『また』一ヶ月よろしく。お隣さん」

右隣にいたのは見慣れたというよりもはや見飽きた顔。美鈴。

腐れ縁もここまで来るとすごい。もう鎖縁と表現を変えるべき。

ま、気心が知れているってことではある意味よかったのかもしれないけどな。

「で、左隣は……っと」

反対側に振り向いた俺は、ふわりと爽やかな柑橘系の香りに包ま

れる。

こ、これは、まさかっ……………！！

「一ヶ月、よろしくね山田君。いい席取れてよかったー」

そう言つてにこりと微笑んだこの天使。いや違う。長谷川佐代子さん。

「……………神様……………！」

俺は思わず胸の前で十字を切る。いや別にクリスチャンって訳ではない。

それぐらい、うれしかったのだ。長谷川さんの隣が。

クラスでも目立つ方じゃない。でもきつと密かなファンは多いと思う。

綺麗に切り揃えられた前髪。でもそのさらさらの髪は実は腰に届くほど長く艶やかだ。ちよつとたれ目がちな瞳と小さな口が上品さを醸し出し、それでいて常に笑顔で周囲に優しい雰囲気振りまく。

何より。

『ハーレム機能』を手に入れる前の、凶悪な俺の目を避けることなくまっすぐ見つめ、他のクラスメイトたちに対する態度と一切変えることなく接してくれた彼女。それが当時の俺にとってどれほどうれしかったことか……………。

「……………山田君。山田くん。おーい」
「はっ」

危ない。幸せの余り思わずトリップしてしまった。もう異世界には用はないのに。

「……こちらこそ、よろしく」

クールに行こうぜクールに。

「はい。……やー、実はこの席売ってくれて言われてただけどねー。日当たりいいし、やめといてよかったよー」

そう言つて陽だまりの猫のように目を細める長谷川さん。『隣の隣で良かった』なんて、そこまで言ってくれることまでは期待しない。……それに、今の俺には『ハーレム機能』がついている。この力があれば、すぐに長谷川さんとも仲良く……。

つんつん。

「ん？　なんだ？」

控え目に背中をつつかれる感触に、俺は振り返って——絶句した。

そこにいたのは、長い前髪では隠しきれないほど瞳を輝かせた小鳥遊小鳥。

俺には小鳥遊がうれしさのあまり力一杯振り回している尻尾の幻すら見える。何でお前そんなに子犬っぽいんだよ。お前鳥だろ。鳥類だろ。隼なんだろ。

残念。小鳥遊さんは人間でした。だから日本語を話します。小さな声で。

「やった。やりましたよ晴樹くん。お隣にはなれませんでしたけど後ろです」

「俺の後ろに立つな」

無意識に撃つちまうから。

「授業中ずっと背中を見つめていられます」

「黒板見ろ」

俺の背中に穴が開くから。

「じゃあ語りかけます」

「ノートとれ」

俺の背中に呪文呟くんじゃねえ。何か湧いて出てきたらどうする？

小鳥遊の発言一つ一つにダメ出しをする俺。でも小鳥遊の笑顔は崩れない。何だこいつ？ やっぱりMなのか？ 普通ここまで言われたら心折れないか？

「えへへ……。なんか、いいですね。こっこの」

「お前やっぱりM……。っと。じゃない。……。一体、何がいいんだ？」

「か、会話のキャッチボール？」

「……………」

……その時俺の脳内には、俺が力一杯、明後日の方向へ投げつけるフリスビーを全力疾走でうれしそうに追いかける子犬の姿が浮かんだ。……うん。ぴったりだ。

「ま、お前が楽しいのならそれでいいや。……くれぐれも言っておくけど、学校で魔法使うなよ。問題起こすなよ。俺に迷惑かけるなよ。わかったな」

「はいっ！」

声は聞こえていないだろうが、そんなやり取りをする俺たちを興味深げに見つめる美鈴。……うーん。こいつ鋭いからなあ。千里眼

だし。気をつけないと……

ほんと、何も無いことを祈ろう……。

——往々にして、神様というのは案外性格が悪いものである。彼らは、真剣な願いであればあるほど、叶えてはくれない。

俺の真摯な願いは、早くも次の授業で裏切られることになる。

カリカリカリ……。

鉛筆を走らせる音だけが、静かな教室に響く。

二時間目。数学の授業は小テストだった。

背後に不安を抱える俺にとって、ディスカッションをしるとか言われる授業よりテストのほうが、むしろ今は都合がいい。

「あつ……」

小さな声が隣から聞こえる。そつとそつちを見ると、長谷川さんが消しゴムを落とした模様。それはころころ転がり俺の足元へ。

……やるじゃねえか『ハーレム機能』。ちょっと控え目なフラグだが、つかみとしてはむしろこのくらいでちょうどいい。

俺は数学担当の森先生に気付かれないよう、そつと屈んで消しゴムを取ろうとする。

「あっ……」

もう一度、先程と同じ声。違ったのは発せられた位置。それは驚くほどすぐそばから聞こえた。具体的には、互いの吐息が顔にかかるくらいの近さから。

消しゴムを掴むつもりで握った俺の手は、柔らかく華奢な長谷川さんの手を掴んでいた。……俺に気を使って自分ですらとろろとしたのであろう。目の前に、俺と同じく屈みこんだ長谷川さんの、綺麗な白い顔がある。

「……！！」

俺は無音で叫び声をあげる。我ながら器用だと思う。その表情に驚く長谷川さんは、しかし、すぐにいつものように優しく微笑み、そっと人差し指を立てて自分の口に充てる。

「しーっ……ねっ？」

ずきゅーん。

撃ち抜かれた。いや、もう木っ端みじんに打ち砕かれた。おいだめだろうその天使。なんでそんなに可愛いんだよちくしょう。ついでに神様。『ハーレム機能』をありがとう。また何かあったら呼んでください。いつでも馳せ参じます。

……しかし、幸せな時間は長くは続かない。

キーンというその微かな音。それに気がついた人は他にもいたかもしれない。しかし、その音の正確な意味を知るのはこの世でただ一人。いや二人だけだ。

その音は『向こう』でよく聞いた音。……すなわち、魔法の起動音。

慌てて視線を上げる。ちょっとだけ悲しげな表情をした小鳥遊。その視線は握りあった俺と長谷川さんの手に固定されており、自身の発動する魔法に気が付いていない。

——『ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくて……。か、感情が高ぶったりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって……！』——

昨日の放課後、小鳥遊の言っていた言葉が脳裏によみがえる。

まずい。まずいますまずいます、まずい！！

命の危険もさることながら、このまま魔法が発動したら小鳥遊の正体がばれる。

現代社会に登場した魔法使いがどんな運命をたどるか、どう考えても悲惨な未来しか見えない。国に捕まり実験動物扱いとか、さすがにかわいそうだろ！

……気がついた時には体が勝手に動いていた。

「小鳥遊！　ここがわからん！　教えてくれ！！」
「きゃっ！」

振り向きざまにそう叫びつつ、小鳥遊の肩を押さえる俺。いきなりの事に驚いた小鳥遊から、無意識に発動しかかっていた魔法の気配が消える。よかった間にあつた！

「おい小鳥遊。お前今魔法を……」

「え、あ、ああ！？」

「……つたく。仕方のないやつだなお前は」

「……仕方のないやつなのは、お前だ。山田」
「へっ？」

振り返るとそこには、鬼の表情をした森先生。わお。

「先生、教師生活は結構長いが、これほど堂々としたカンニングを見たのはこれが初めてだ。……何か、反論はあるか？」

「……あー、えー、はい。すいませんでした。全面的に俺が悪いです」

「ではこのテスト、お前の答案は没収。後日、補習で再実施ということでもいいな」

「はい。もう先生のおっしゃるままに……」

おかしいなあ。俺、先生を含めたクラス全員の命の恩人のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、廊下に立ってなさい」
「はい」

すくすく廊下へと旅立つ俺に向け、何度も何度も涙目で頭を下げる小鳥遊。

……ま、いいよ。

さすがに鳥類魔物目イヌ科の小鳥遊とはいえ、実験動物にされるのを黙って見ていたら夢見が悪いし。だからこれはお前のためじゃない、今後の俺の安眠の為にしたことだ。そんなに気にするな。……でも。でもな。そんな些細なことより許せんことがある。

無人の廊下に出た俺は、一人、魂の叫びをあげる。

「……くっそお!! せっかくいい雰囲気だったのに! ……おのれ『隼のフラグブレイカー』! 次は絶対負けないからなあああ! ……!!」

がらっ!

「うるさいぞ山田! 廊下じゃなく外に出るか! ああん?」
「す、すいませんでした先生! 静かにします!」

……とほほ。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています（後書き）

12/16、まさかのジャンル別日刊二位……。

信じられないというか、「まさかドッキリ？」というのが本音です。
読んで頂いた皆さん、本当にありがとうございます。

多くのお気に入りだけではなく、ワールズエンド様から
素敵なレビューまでつけて頂き、この作品は幸せ者ですね。

更新がんばります。

もしよろしければ感想が頂けたら、とても、とってもうれしいです。
これからもよろしくお願い致します。

幼馴染は千里眼

米つきバツタというものをご存じだろうか？

日本名でシヨウリュウバツタというバツタの通称である。こいつが後ろ脚を押さえられると、まるで米をつくように頭を上下に振ることからその名がついた。ちなみにその姿を揶揄してペコペコと頭を下げる人という意味に使ったりする。

何でそんないらん豆知識を披露するかって？

その理由。それは今、俺の目の前に等身大（よりやや小さい）の米つきバツタがいるからだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

授業終了のチャイムと同時に、弾丸のごとく廊下にいる俺の元に走り寄り、それはもうすごい勢いで頭を上下に振る小鳥遊。見てるこっちの目が回りそう。

「あー……。もういいから。うん。次から気をつける」

本当は全く許してなどいないが、小鳥遊本人の涙目よりも周囲の目が痛いのでそう言っておく。目つきの悪い俺に小柄な小鳥遊が頭を下げまくる姿は、他人から見たらチンピラが小学生女子相手に力ツ上げしているようにしか見えないだろうし。

そういう訳で大変不本意ながら、もう怒ってないぞーという意味を込め、二、三度軽く小鳥遊の頭をポンポンと叩き、俺は教室に戻る。置いてきぼりを食った小鳥遊が肩を落としているようだが、ま、

少しは反省してもらわないと困るし、いいだろ。

「おー。カンニングの現行犯だー。おかえりー」

間延びした声でそう言いつつ、俺を迎えてくれるお隣の天使。いや長谷川さん。

「あれ？ でも山田君、カンニングしなきゃいけないほど成績悪かったっけ？」

俺が答える前に、横から口を出してくるお隣の悪魔。いや美鈴。

「晴樹、数学は悪くないよ。前回のテストでもこのクラスで二位だったし」

「よくそんな細かいことまで覚えてるな、美鈴」

「うん。だって一位、私だし」

うわー性格悪いなこいつ。知ってたけど。

「だからカンニングの必要なんてないはずなんだけどね。……さすがにもう、ごまかしはきかないと思うわよ？ 晴樹。悩みがあるなら言いなさい」

「む……」

——実は異世界からチート機能持ち帰った小鳥遊さんに迫られているんです。

……言えねえ……。

「……すまん」

「そ。無理には聞かないから言いたくなったらどうぞ」

これが美鈴の数少ない美点の一つ。こいつは俺に対して踏み込み

過ぎることがない。なんだかんだと世話を焼きたがるが、ある一線を超えることはない。多分、この絶妙な間合いを維持できるからこそ、俺と美鈴は腐れ縁のままでいられるのだ。その点には、まあ、ほんの少しだけ感謝していいくもない。

「……あんたのことは、まあいいわ。でも『あれ』なんとかしたほうがいいわよ」

俺は美鈴の視線に合わせて『あれ』とやらを見る。……小鳥遊が掃除用具入れのロッカーとお話をしていた。……大丈夫かあいつ？ どうでもいいけど、隅っこが似合うなあ。小鳥遊。

「よく言うでしょ？ 『ペットを飼うからにはちゃんと世話をしなさい』って。あんた、飼い主として何とかしなさい」

「俺も結構ひどいこと言うほうだけど、お前には負ける。あと俺は飼い主じゃねえ」

友達をペット扱いするなよ。そりゃ確かに小鳥遊は小動物系だけどさ。

「……ま、昼休みにでも話しておくよ。ありがとな。美鈴」

しかし、この日、『小鳥遊小鳥と語り合う昼休み』は来なかったのである。

四時限目。相変わらず雑談の多い日本史の時間に、それは起きた。

「あー。次のページ。小鳥遊さん。読んでください」
田中先生のご指名は小鳥遊小鳥さん。

「……ん？」

返事がない。ただの……ではなく。どうした小鳥遊？ 今度は机とお話するのに夢中で指名に気がつかないのか？ 仕方ないな。

「おい、小鳥遊。指されてる指されてる。五十二ページから……」
振り向いた俺はそこで言葉に詰まる。前髪に隠れていてわかりにくいが、小鳥遊の顔色が悪い。悪いというか白い。え？ どうした小鳥遊？ 机にひどいと言われて傷ついたのか？ チビとか小動物とM体質とか。

「あ、ごめんなさい。晴樹くん……。五十二ページ、ですね……」
「お、おい。顔色悪いぞ？ 平気か」
「だいじょうぶですよ。だいじょうぶ……」

ボタン！

「うおっ！」

無理して立ち上がろうとした小鳥遊が前のめりに倒れる。つまり俺の方へ。

反射的に受け止めた俺は、その想像以上の軽さと細さに驚く。

「た、小鳥遊さん！ 山田君！ 平気かね！？」

「お、俺は平気です田中先生。でも小鳥遊が……」

完全にくたつとしている。おかしいのは顔色だけじゃない。なん

か変な汗をかいてるし、呼吸も早い気がする。

「おい。小鳥遊！　おい！？」

「ん……。ごめんなさい。晴樹くん。なんか、くらくらして……」
意識はあるみたいだ。一安心……。はできないよな。仮にも女の子だし。

「田中先生。小鳥遊、体調悪いみたいです。このまま保健室行つてきます」

そう言つて俺は器用に体を反転させ、小鳥遊を背負う。……うわ、やっぱり軽い！　これ本当に俺と同じ年の人間の体かよ。女体の神秘だわ。

……ここでドラマや映画なら『お姫様抱っこ』とやらをしていくのだろうが、さすがにそれは……。ねえ。いや、そんなこと考えてる場合じゃない。しっかりしろ俺。

「山田君。任せました。あとで担任に報告もお願いします」
「了解しました。行つてきます」

「……疲れによる貧血。二、三時間寝てれば歩けるようになる。以上」

そう男前に断言するこの人。擁護の吉田先生。眼鏡に白衣の美人教諭。

「言いきりますねえ。ホントに大丈夫なんですか？」

「私の言うことを疑うのか？ ああん？」
「滅相もございません失礼しました！」

この吉田先生に『ハーレム機能』が通用しない理由。それは極めてシンプル。

俺なんかより段違いに怖いのだ。この人の目。俺がチンピラクラスだとしたら吉田先生はもう完全に本職。ヤの付く職の人にしか見えなない。ヤ。ト運輸の人ではないぞ。

俺の『ハーレム機能』は俺を嫌い避ける女性にしか通じない。つまり俺を恐れないし、嫌つてもいない、というか歯牙にもかけていない吉田先生には全く通じないのだ。

「ま、心配ならあとで様子を身に来い。……ほら、チャイムが鳴った。ぐずぐずしていると昼飯食い損ねるぞ？」

「ん……。そうですね。じゃあ俺は戻ります。失礼しました」

「おう。こいつも動けるようになったら教室に戻す。担任にもそう伝えておいてくれ」

「イエッサー、ボス」

——しかし小鳥遊は、昼休みが終わり、午後の授業が全て終わっても、教室に戻ってくることはなかった。

「……はい。晴樹。これ」

西日差し込む放課後。考え込む俺の前にカバンと子犬模様の巾着

袋が置かれる。

「なんだこれ？ 荷物もちか？ 俺まだジャンケンしてないんだけど？」

「小学生じゃあるまいし……。それ、小鳥ちゃんの。行くんでしょ？ 保健室」

「待て美鈴。なぜ俺が保健室なんかに」

「顔に書いてある。『小鳥遊が気になる。でもどうしよう。行こうかなやめようかな』。……他の人はだませても、この私だけはだませないよ。晴樹」

降参。

「二時間目の事があるからな。小鳥遊も俺と顔合わせづらいんじゃないかと思ってる……。って言ったら、これは『逃げ』かな？」

「逃げ、だね。……ま、いいわ。そんな迷った顔見せるくらいなら今日はやめておいたほうがいいかもね。私が届けてあげ……」

そう言いつつ荷物を持ち上げた美鈴の声が止まる。何だ？

「……と、思ったけどやめた。やっぱり晴樹。あんたがいくべき。じゃあ私は帰るから、あとはよろしく。逃げるなよ……。あ。あとこれ。あげる。飲みかけだけど」

そう言っただけ渡されたのはペットボトルのお茶。……なんだこれ？ 意味不明なんですけど美鈴さん。お茶でも飲んで落ちつけて意味か？

「どういう意味だこれ……？ って！ お、おい。美鈴！」

俺の制止の声に振り向きもせず、ひらひらーっと手を振って行ってしまう美鈴。意味がわからん。いいじゃんカバンくらい届けてやれよな。冷たい奴め。

仕方なく二人分の荷物を手に保健室に向かう。ほんと、今日は厄日だ……。

「失礼しまーっす。……あれ？ 先生いないのか……。おい小鳥遊ー。少しは体調戻ったかー？ 荷物持ってきてやったぞー」

わざわざ大声で言うのは、ベッドに横たわる女性に対する礼儀だ。もし衣類が乱れてたとしても、この声を聞いて正せる時間がとれるだろ？ うん。俺マジ紳士。あれだよ。無神経にカーテン開けたら、着替え中の美少女が「きゃっ！」って悲鳴を上げるとか、そんなのは二流ハーレム師のやることなのさ。

「あ……は、晴樹くん！？ ご、ごめんなさいまた迷惑を」

「いいから。友達だろ？ 気にすんな」

意識的に『友達』に力を入れてみる。効果、あるのかなあ？

「ほんとに私ダメダメで……。泣けてきます……」

俺の知る限り小鳥遊。お前は人生の半分近くを涙目で過ごしているような気がするんだが？ ま、それはどうでもいい。俺の人生じゃないし。

「で、もう平気なのか？ 体調？」

「は、はい。ぐっすり寝たので……。寝不足で倒れるなんて恥ずかしい……」

「そうか寝不足だったのか。そりゃ寝れば治るわな……って、おいノリ突っ込みって難しい。芸人さんって大変だ。……ではなく。」

「人を散々心配させといて寝不足だあ！？ おいこら小鳥遊！」

「ご、ごごごごめんなさいっ！」

俺はベッドに横たわる小動物を睨みつける。前髪のカーテンをも貫くその眼光に怯え、もそもそと布団に潜り込む小鳥遊。

「じ、実は、この三日ほど、あんまり寝てなくて……ごめんなさい」「あ、そつか。すまん。異世界からこっちに帰って来たばかりだもんな。そりゃ向こうの事も魔王の事も気になるだろうし、寝れなくても仕方ないか」

意外に繊細なんだなあこいつも。怒鳴ったりして悪かったよ。

「二日前までは『どうやって晴樹くんに告白しようか』って考えてたら眠れなくて、昨日は『ついに告白しちゃった……』って思い返してたら寝れないし……で」

「何でお前の頭ん中は晴樹くんしかいねえんだよ！ 晴樹ハーレムかよ！ この鳥頭が！ あっちの世界の魔王とその一味に謝れ！

ついでに俺にも！」

「ご、ごめんなさい魔王さん。ごめんなさい魔物さん。ごめんなさい晴樹くん！」

律儀な奴め。あと魔王魔物と同列で俺に謝るな。なんか俺まで魔王軍の仲間みたいじゃねえか。俺、勇者だぞ一応。何もしなかった

けど。風邪ウィルス万歳。

「……まったく。もういい。俺は帰る。小鳥遊は念のためもう少し休んでろよ」

心配して損したわ。寝不足程度なら一人で帰れるだろ。

そう考えつつベッドに小鳥遊の荷物を置こうとして、うっかり巾着の紐を引っかけてしまう。子犬柄っていうのがこいつらしい。……っと。中は見ちゃいかんよな。女の子の秘密のブツとか出てきたら気まずいし。

しかし、俺は見てしまった。入っていたものはそんなブツではなく……。

——その巾着の中身。ピンクの小さい弁当箱と、それと比べるとやたらとでかい、明らかに男性用とわかるもう一つの弁当箱。

……その意味を理解し、思わず固まってしまった俺。そして、黙り込んでしまった俺が気になったのか恐る恐る布団から顔を出す小鳥遊。

「あっ……」

「あ、その、悪い。勝手に見るつもりはなかったんだ。なんか、こう、紐がベッドの柱に引っかかって……」

しどろもどろになる俺を見つめ、やがて寂しそうに微笑む小鳥遊。

「あはは……。それ。それも寝不足の原因なんですよね。……晴樹くん、何が好きなーとか、卵焼きは甘いほうがいいのかなーとか、いつしよにお昼とか幸せだなーとか、いろいろ考えてたら、何かすつごく時間たつのが早くって……」

「……………」

「でも、やっぱりダメですね私。せつかく作ってきても、肝心のお昼の時間にぐーすか寝ちゃうなんて。笑っちゃいますよね。バカですよねえ」

……うん。お前はバカだ。こんなハーレムが夢とか本気で言うてる男にそこまで惚れてしまったお前はバカだ。……でも、俺は笑わない。笑えるか。

「……よこせ」

「へっ？」

「それ、よこせ。あと箸も」

「は、はいっ！ どうぞっ！」

しゅぱ！ そんな効果音がつきそうな勢いで箸と弁当箱が差し出される。

「お前も食べ。昼、ぐーすか寝てて食ってないんだろ？」

「え、でもここ保健室……」

「いいから！」

「は、はいいい！ ……あ、でも飲み物が……」

どん。

「お茶でいいだろ？ 紙コップなら薬飲むとき用のがあるしな」
「は、はあ……。用意周到なんですね……」

俺の、チートでピンポイントな千里眼の持ち主で、お節介な幼馴染が、な。

「いただきます」

「い、いただきます」

「……小鳥遊。揚げ物にはソースだろ？」

「え？ うちマヨネーズですよ？」

「このマヨラーが。ブルドック様とオタフク様に謝れ」

「マ、マヨネーズだっておいしいのに……」

「明日もマヨネーズかけの揚げ物が出たら残すぞ」

「そ、そんなに嫌がらなくても……って。え？ 明日？」

「もう一度言おうか？ 明日もマヨネーズかけの」

「は、はいっ！ 今日、帰りに買います！ ソース！ 各種！ 箱で大人買いします！ 買い占めます！ そして明日のおかずは原色が見えないほどソースまみれにします！」

「それはやめろ。『高血圧で早く逝け』って意思表示かと思っちゃうから」

コクコクと頷く小鳥遊。

「……心配だから監視する。メシ食ったらスーパー行くぞ。お前がちゃんとソースを買って帰るか不安だからな。飼い主としてきちんと見張る義務がある」

「か、飼い主って……。あと、さすがにソースくらい一人で買えます……え？ あ、あれ？ それってもしかして送ってくれるって」

「その先を口にしたら今すぐ俺は帰るからな。一人で」

慌てて口を両手で押さえる小鳥遊。オーバーアクションなやつだ。

ま、あれだ。食いものには罪はない。

だから、今日は負けてやるよ。

『隼のフラグブレイカー』

明日は容赦しないからな。『ハーレム機能』の真の力、見せ付けてやる。

「……は、晴樹くん、晴樹くん」

「なんだ？」

復讐に燃える俺に小声で話しかける小鳥遊。その手にはフォークに刺したタコさんウィンナーが……。

「あ、あーん……」

「するかボケえ！ 調子に乗んなこの鳥類が！ こんな保健室にいられるか！ 俺はもう帰るぞ！」

「あ！ 冗談ですごめんなさい！ 待つて！ 帰らないで！ おいてかないでええええ！！」

やっぱりダメだ！ ペットは甘やかすと付け上がる！

明日こそは泣かせてやるからな小鳥遊！
いつも泣いてる氣もす

るけど！ 吠え面かせてやるから覚悟しとけよ！！

……いぢぢぢぢぢぢ。

幼馴染は千里眼（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797z/>

異世界ハーレム彼女の逆襲！

2011年12月17日18時50分発行